

中国青海省地震・四川省大地震 被災地からの報告

【主催】 NPO法人レスキューストックヤード

【目的】

レスキューストックヤード（以下：RSY）では、2008年中国四川大地震発生後から今年3月にかけて、「パンダタオルプロジェクト」（以下：パンダP）を行ってきた。発災から2年を迎える5月12日に向けて4月上旬よりメモリアルイベントの準備を進めていたところ、4月14日に中国青海省地震が発生した。地震はM7.1を記録し、2,000名以上もの尊い命が失われた。

パンダPの協力団体であったCODE海外災害援助市民センター（以下：CODE）が支援募金を開始したため、RSYでもメモリアルイベントの一環として「中国青海省・四川大地震被災地支援募金」を実施した。活動には多くのボランティアが参加して下さり、イベントと募金活動で集められたお金の一部を、CODEに寄付させて頂くことになった。

今月、青海省を訪問されたCODEスタッフ・吉椿雅道氏が一時帰国されたため、急きよ名古屋にお招きし、現地報告を行うこととなった。

日本の報道機関からは、今やこの地震の情報を入手することはほとんどできなくなった。被災された方々の生の声を聞く貴重な機会になる勉強会とする。

【実施概要】

■ 日時：2010年6月29日（火）（19：00～21：15）

■ 場所：名古屋建設業協会 1F会議室

■ 参加：約20名

- ・ 19：00～19：05 挨拶 浦野 愛（RSY 常務理事）
- ・ 19：05～19：10 RSYの活動について 加藤 祐子（RSY 事務局ボランティアスタッフ）

- ・ 19：10～21：10 中国青海省・四川省大地震 被災地からの報告 吉椿 雅道氏（CODEスタッフ）

※途中、質疑応答をはさむ。

- ・ 21：10～21：15 募金の贈呈（RSYからCODEへ 名城大学・学生から吉椿氏へ）終わりの言葉・終了

■ 報告1／「四川大地震から2周年 RSYの活動について」加藤 祐子（RSY事務局ボランティアスタッフ）」

RSYが「忘れない・想いを馳せる・気持ちを届ける」を合言葉にパンダPの活動として、計4回で約1,050個のパンダタオルを届けてきた。活動は3月で節目を迎えたが、今年の5月12日が地震から2周年なのでメモリアルイベントを開催することとした。

そんな中、青海省で地震が発生。CODEで青海省地震の募金活動を開始したことをきっかけに、RSYでも四川省のメモリアルイベントと併せて青海省地震の街頭募金を行うことに決めた。5月6日～8日の3日間でパンダPメンバーやRSY会員、多くの学生にご協力いただいた。8日は日中友好協会の方々や、中国人留学生にもご参加いただいた。

メモリアルイベントは5月12日の夜1Fピロティで開催した。準備の段階から「ほのぼののあかり」のための200個のペットボトル集めや芯作り等、多くの方にご協力いただいた。

イベントの内容は、5.12四川のメモリアルキャンドル、四川省の2年・写真展&クイズ、みんなの一行メッセージ、そして中国料理の販

売だった。中国料理は事務所近くの中国料理店・桃花源さんの方の協力による。スタッフが四川省出身で、お店に募金箱を設置し、RSYの活動にご賛同いただいた。

今後は、CODE吉椿氏の現地レポートを発信し、私たちにできることを、続けていきたい。

■ 報告2／「中国青海省地震・四川省大地震 被災地からの報告」吉椿 雅道氏（CODEスタッフ）



◇四川省大地震（光明村）について

四川省では、復興の格差が課題となっている。光明村唯一の医者診療拠点となっていた仮設住宅が撤去され、移転先が見つからない状況が続いていたが、ようやく決まった。村に働ける場が無い上に、住宅再建のために抱えたローン返済を迫られ、村人の半数が出稼ぎに出てしまった。現在村には女性、高齢者、子どもの姿が多く、中国全土においても高齢化はますます加速するだろうと見込まれている。また、震災障害者の方も表に出てくることがない。彼らもまた仕事を得ることが難しい現実に立たされている。しかし、CODEが村人と共にずっと構想を温めてきた地域の活動拠点「老年活動センター」の準備が進みつつあり、村の課題の解消に向けて確実な一歩を歩みつつある。何度も村人たちと話し合いを重ねることで、「自分たちの手で作る

自分たちの拠点」という意識が育まれ、それが村人たちの自信につながってくる。被災者支援を行う上で大切なことは、最初から物やお金、アイデアを「与える」のではなく、必要なものを一緒に見出し、被災者が自らの手で選び、創っていくというプロセスをサポートすることである。今後「老年活動センター」には高齢者を中心とした村人たちが集える憩いのスペースを設け、伝統構法による木造建築の展示や防災教育等、防災・減災につながる震災活動記念館も設置する。

◇青海省地震について

被害がひどかった地域のひとつである青海省玉樹チベット自治州は97%がチベット人である。文化や言語が大きく異なる地域であり、そういった面からみても支援は困難である。標高が高く、植物が育たない森林限界地帯であり、森林資源に乏しく、家は耐震性の弱い土やブロック、レンガ、平石等が使われていることが多く、今回の地震による死因は、土埃による窒息死が多く見られた。また、800年の歴史ある寺や仏塔も倒壊した。結古鎮という街は23,000人の街だったが、壊滅的な状況だ。80~90%の建物が倒壊している。

チベットには3つのエリアがあり、今回の被災地・青海省玉樹チベット自治州はそのひとつであるカム地方である。中国の行政区画の区分けでは、チベット行政区、青海省・四川省の3地域にまたがっている。長江・黄河・メコン川の源流があり、山々に囲まれ草原が広がる地形で、遊牧民も多い。青海省の省都・西寧からは山道を通る道路が1本で、直線距離にして800kmあるため、資材・人を運ぶのも困難だ。また、標高が高いため、1日の寒暖差が激しく、夏でも雪が降ることがある。5~8月が夏で、この時期を過ぎるとセメントも固まりにくくなり、復興作業も困難だ。長

く寒い冬はマイナス30度にまで気温がさがると、これから夏の間にはできることを急速に進めなければならない。また夏は雨季で雨が多いため、避難キャンプでは土のうを積んで対策を行っている。

印象的だったのは、チベット仏教の存在だった。チベット人にとって、チベット仏教は心のよりどころであり、何よりも早くお寺の再建を行うことが被災者の心の癒しや気力の支えに直結していた。発災直後から、テントの中にお坊さん達が修行する場所や読経する場所を確保し、親族を無くした被災者が安心して祈りを捧げ、慰められる場が作られた。心のケアを専門としたNGO団体も早々に現地入りしたが、「チベット人には心のケアはいらない。チベットにはチベット仏教があるから」と言われた。その土地の文化ややり方、気持ちを尊重しつつ、よそ者はよそ者の出せる力を持ち込みながらも、まずはその土地の人の声を聞くことが大事なのだ。被災者にとって何が一番支えになっているのか、被災者のアイデンティティーを保つものは何かを常に考えながら支援活動を展開しようとしている。

他に、医療の問題も浮き彫りになっている。一部のNGOでは無料診断を未だ行っているが、震災後の1カ月が無料という決まりに沿って病院が対応を行っているため、政府からは警告を受けている。またNGOとしても、無料で続けることは財政的に困難である。しかし、現実的には、医療費を払えない被災者がほとんどであることも事実である。

複雑な民族問題や政治の中では、もれていく人がどうしても出てきてしまう。多方面からの支援が必要で、一人ひとりのためにできる支援活動をしていきたい。

■ 質疑応答



- ・ 格差の広がり、治安悪化につながっていないか。情報が埋もれているのではないか。
→ 確実に格差。対口支援も問題があり、修正が必要。末端の村への支援がない。中国にとっては2008年がボランティア元年。まだまだNGOも経験不足である。政府はNGOに敏感な姿勢だ。反政府ではなく、非政府であることの理解を得ていく必要がある。政府ができないことをNPO・NGOがカバーしていく動きに中国の学者たちも積極的な意見を述べている。

とり残された村では情報が埋もれていく。まだ2年目であり、これは今後の課題である。小さな日々の不満はあるが、それがデモにつながるようなことは今のところない。

小さな日本のNGOがこのような情報を伝えていくことは、体面上問題があるかもしれない。だからこそ地元のNGOが育ててくれればという想いもある。

- ・ 中国の人にとって、災害を振り返る、記念にするのはどういう意味があるのか。
→ 4つの地区、北川・汶川の映秀・漢旺・青川に震災記念博物館（北川・映秀には博物館、その他は遺跡）がある。震災の時に崩れたガレキ等を展示している。どれだけ被害が酷かったか、傷跡を生々しく、後世に伝えるための展示だ。しかし防災という視点での提案が少ない。地震はもう起こら

ないと信じている人もいる。だからこそ光明村の老年活動センターでは、防災の取り組みを展示できないかと考えている。未来につなぐという考えを持つこと、それが中国での課題でもある。四川省・青海省での地震の発生率からもその必要性がある。

- ・ 老年活動センターは観光資源になりうるか。
→ そもそもは観光資源にすることを目的としていない。外部向けというよりは地元向けである。しかし着工時等には地元の政府を呼んで、関連各所とのつながりも重視し、外部へのアピールも考えている。伝統的な建物（三合院）なので、多少観光的な要素を持つかもしれない。そうすれば、お茶屋・売店などの運営もできるかもしれない。こういった可能性も残しておきたい。
- ・ センターのランニングコストはCODEの援助なのか。
→ ランニングコストも村の人に任せている。そういうことも含めて村の人に考えてもらわなければならない。自分たちのものを自分たちで作るという感覚をもってもらっている。それば自信にもつながる。「与えるのではない」支援の在り方が大事。

■ 参加者の感想

「自分もボランティアの一員として人のためになるようなことをしていきたい」「地震の怖さを改めて実感した。」「人間は絶対にひとりでは生きられない。周りのみんなと交流をしてお互いに助け合っていくのが大事。」「まずは知ることが大事だと思った。」「経済発展の中で被災地支援の格差の大きさに驚いた。」「中国だけでなく、他国からの支援も必要だと思った。」「日本の報道で知ることができなかった被災地の現状を知ることができてためになった。」「被災者個人の目線の話と国家レベルの大きな枠組での話まで、わかりやすか

った。」「被災者の方々だけでなく、国家そのものに対しての理解と暖かさが感じられ、そのバランスがすごい。」「チベットの話は新鮮だった。」「自国ではなく他国に入って長期間支援をすることはなかなか容易にはまねできない。」など。

■ まとめ

青海省地震は、今年の4月14日に起きたが、すでに日本で報道されることは皆無に近く、青海省で地震が起きたことすら忘れられている現状がある。今回は被災地を訪問した吉椿氏より被災された方1人ひとりの置かれている状況や、抱える課題、チベット文化圏の特徴、また四川省・光明村の現状、四川大地震後の中国のボランティア活動の広がりなど、幅広く深い生のお話をお聞きすることができた。

現段階で私たちにできることは、CODEを通じて活動資金を被災地に届けたり、被災地からの情報を今回のように皆様にお伝えしたりしていくことである。RSYでは、四川省大地震・青海省地震ともに関連団体と協力をして、皆様と共に今後も息の長い支援を続けていきたいと思う。

